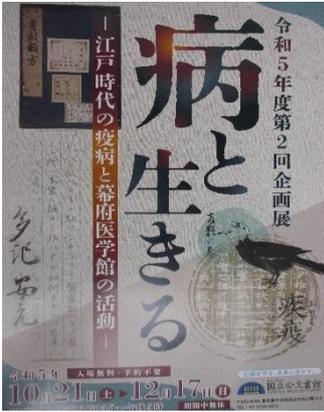
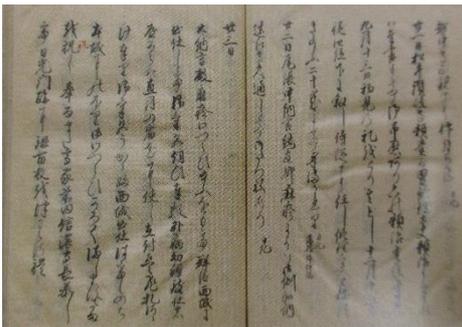


病と生きる ―江戸時代の疫病と幕府医学館の活動―

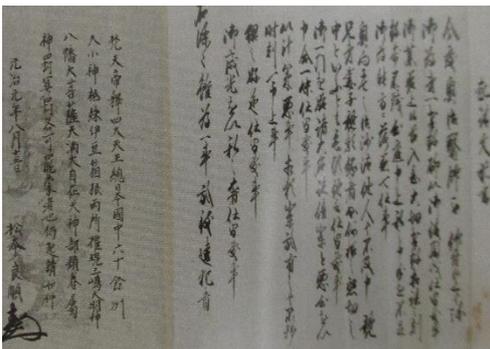
国立公文書館(北の丸公園) 23.10.21~12.17



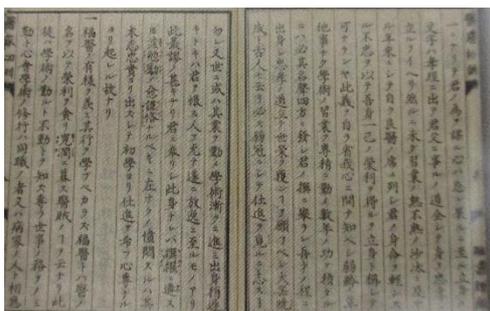
「令和5年度第2回企画展」として開催される本展は、江戸時代に流行した疫病（特に、流行り風邪・麻疹・疱瘡・コレラ・梅毒）の流行状況や、その時々の社会や人々の対応・対処等について当館の所蔵資料を紹介している。また、江戸幕府がこうした疫病に対して、どのような対策をしたのか、幕府の医療対策に注目するとともに、幕府の奥医師であった「多紀元孝（たきもとたか）」が設立し、後に幕府直轄となる医学館活動についても取り上げている。



「御実紀」(ごじっき): 通称「徳川実紀」と呼ばれて、「林述斎(じゅつさい)」らにより編纂され、1843(天保14)年に完成した『幕府の正史』である。初代「家康」から10代「家治」に至る歴史毎の治績を編年体で記し、逸話については付録としてまとめた。



「奥御医師誓詞(おくごいしせい)」: 1864(元治元)年8月に「松本良順」が奥医師に任命された際に、老中「牧野備前守」と若年寄の「平岡丹波守」へ提出した誓詞で、起誠文前書には奥医師が守るべき条項が列挙されている。神文の部分には「熊野那智大社の牛王宝印(ごほうほういん)紙」が用いられている。



「医家初訓(いかしょくん)」: 江戸時代の奥医師が医師の心得や医学の教訓について記した全16条の箇条書き(全1冊)。画像は「福医(ふくい)」(実力がないのに裕福な医師のこと)について述べた箇所、で、「医賊(いぞく)」であると断じている。